

現実を創り上げよう

ジャン＝ピエール・リモザン(映画監督、「インターナショナル・コンペティション」審査員)

数年前、フランスのある知識人が一冊の本を出版し、その主たる命題として、「真実」に寄り添わんとするドキュメンタリー映画は貧しさを自ら引き受けなければならないと主張したことがあった。撮影方法は貧しく、美学においても節制しなければならないと！ 知人であり、この知識人を評価している私は、それに対する反論を自らの裡に抑え込んだ。この書物はなんら論争を引き起こすことはなかったが、それはまた、理論上は表明しうるこうした主張がすでに定着しており、とりわけテレビ局で責任ある立場にある人間には馴染み深いものであることを物語るものだろう。

私はといえば、ドキュメンタリー映画には、全てを使うわけではないにせよ、現存するあらゆる技術的手段、いまだ編み出されていないあらゆる手法が必要とされると考え

ている。ドキュメンタリーには膨大な時間が必要であり、企画を練り上げ、現実と向き合い、その把握につとめながらフィルムに収めていくためには、総体としてスピードが求められるときでも、またそんなときにこそ、筆舌に尽くしがたい時間が必要になるのである。

私が日本で撮影した最新のドキュメンタリーは、数年間の長きにわたって社会のグレー・ゾーンの内部に身を沈めた結果できあがったものだ。「現実」とはいくつもの層が積み重なったものなので、一本の映画のみでその全体を要約することなど、決してできないだろう。実際、誰もがこう理解してくれるとどんなにいいだろうか——一本のドキュメンタリーとはいっただって、来るべき連作の、あるいは作られつつある複数の映画の予告篇なのである。

(中村真人訳)